

# 参加民主主義のすすめ： 逆転型全体主義から自由と平等を守る

浜 野 研 三

言うまでもなく、かかる状況がもたらされた歴史的諸条件、歴史的遺産というべきものはある。しかし、歴史は宿命ではない。堀田善衛『小国の運命・大国の運命』<sup>(1)</sup>

[初めに]

現在、世界の多くの国々で、様々な形での全体主義的な動きが力を増している。日本社会においても同様な動きがみられる。「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」という集団的自衛権の容認に反対するデモに参加した経験に基づいて詠われた句が、公民館の広報誌に掲載を拒否されたさいたま市の事例が象徴するように、政府の方針に反対するような表現を含む作品を公表するときにそれが政治的中立に反するものとして批判されるかもしれないという懸念を持たざるを得ない、自由な議論がしにくい雰囲気が次第に醸成されつつある。民主主義社会であることを表明し、それが日本人の自己理解として根付いているかに見えるにもかかわらず、政府に反対する政治的意見・立場を含んだ作品の場合、上記のような横やりが入ることが次第に増えつつあるようである。また、単なる自主規制でさえなく進んで権力に順応しているのではという疑惑さえ生まれかねないマスメディアの萎縮の度合いはひどいものである。

端的に自由な意見の表明が当然ではないという風潮が支配している社会を民主主義と呼べるのか大いに疑問である。失われた20数年は、3.11、安保法案

の強行採決、格差の増大、非正規労働者の増加などが起こり、経済の領域だけではなく、社会生活全体に重苦しい閉塞感が漂う状況を生み出している。このような日本社会の状況を批判的に理解し改善するためには、民主主義の基本的な理解を明確にする必要があることは言を俟たない。さらに、なぜ民主主義が守るに値する政治体制であるのかについての明確な理解も、民主主義の擁護にとって不可欠である。われわれの社会の基盤とすべきものが何であるのかという基礎的な点を明確に理解しなければ民主主義的社会の存続は危うい。民主主義の理念の明確な理解抜きには、様々な現実から目を背けさせるような装置が大規模に駆使され、権威主義的な体制が次第に構築され、人々の生活空間が狭められていく動きを批判し、それを押しとどめるような有効な運動を生み出すエネルギーを生み出すことは困難である。

実際、民主主義という言葉は多くの重要な構成要素を喪失し、少し誇張を交えて言えばほとんど空語と化しつつあると言いたくなる状況である。それゆえ、実際にそのような事態が到来する前に、危険な動きを押しとどめ、民主主義を活性化させるために、民主主義の基本的な内容、それが持つ長所について改めて顧みることには重要な意味がある。本論文は、まさにそのような考えの下に、参加民主主義の内容とその利点を明らかにすることを目指す。本論文では、まず何よりも、人間の自己形成にとっての他者の重要な役割、より正確に言えば、他者との関係・交流の質の良しあしが、各人の自己形成の歩みに大きな影響を与え、したがって、自己の在り方に重大な影響を持つことを論じる。その上で、民主主義がそのような人間同士の関係の質をよいものにすることを目指すものであり、その実践がより良い自己の形成に貢献しうるものであることを説明する。そのように自己の形成を健全で歪みのないものにするのを可能にする政治体制として民主主義を擁護することが本論文の狙いである。以上の様な民主主義の理解を擁護する視点や様々な論点については、アマルティヤ・セン (Amartya Sen) やセンの洞察を生かして独自の展開をなしているエリザベス・アンダーソン (Elizabeth Anderson) の議論に大きな刺激を受け多くを学んでいることを最初に明確にしておく<sup>(2)</sup>。

まず、民主主義についての私の理解とその長所について論じる。次に、民主主義が空洞化されてゆく動きの特性について、シェルダン・ウォーリン (Sheldon Wolin) が自分の国アメリカについて分析した逆転型全体主義の特性についての議論を援用しながら<sup>(3)</sup>、民主主義が直面している危機について論じ、最後に、それに対処するためにより一層民主主義を強化することの必要、その具体的な内容のいくつかを述べて参加民主主義のすすめとしての本論文の結論とする。

最初に、私が考える民主主義の基盤となる人間像について明確にしておく。人間同士が互いに連帯感を持ち合う、互いにとって貴重な存在であるという人間像を説明する。人間が協調し、共同して事に当たることにより単独では不可能な豊かな文明・文化を創り出してきた存在であるという人間像について語ることから私の民主主義理解の説明を始めることにするのである。

## I. 民主主義の基盤をなす人間像

私がこの章で論じたいことは、人間が互いを必要とし、互いの繋がりによって共同行為の質が決定され、一人ではできないことを成し遂げられることが可能になるだけでなく、自分の自己の内容・在り方自体が他者との関係の質によって、正負の両方向で大きく影響を受けることである。それは自明ではあるが、そのことを今一度明確に自覚し、自分の生を豊かにするためにも他者との関係・交流の質を良好にする必要を明確に自覚することが大切である。自己の健全な育成の障害とならずそれを助長するような社会の在り方こそが望ましく、求めるべきものである。そして、民主主義こそが、そのような人間像に適合する政治体制として、促進し、擁護するに値するものであると私は考えている。

### 〔他者との交わりの中で形成されてゆく自己〕

言わずもがなではあるが、われわれ各自の自己は、自分だけの力で作り出さ

れるものではなく、他者との相互の影響の中で作り出されるものである。何よりも、健全な自己評価を持ち、自らの存在に適切な程度の自信を持つことが重要である。子供の時代に虐待を受け、低い自己評価しか持たず、他者、そして社会一般に対する信頼を持ってない人々は、そのような経験に基づく傷・重荷を背負いながら自己を形成する。そのような場合往々にして、その傷による痛みゆえに様々な種類や度合いの歪みが自己の内に蓄積されそれが後に多くの不幸を生むという悲劇が生まれる。幼少期にそのような不運に見舞われた人は、上記の歪みが生む圧力と戦いながら自己の基盤を形成するという困難な作業を否応なしに強いられる。典型的な例としての永山則夫の場合を取り上げれば、極めて詳細な精神鑑定書によって示される永山則夫の苦しみと彼の自己の歪みは深刻なものであり、幾度か他者からの救いの手が差し伸べられた時でさえ、それを素直に受け入れることができないほど自己や社会についての態度が歪んでしまっていたようである<sup>(4)</sup>。彼が素直に心を開いたのは、同様な傷を負いながらも祖母の強い愛情のゆえに反社会的な行動に走ることなく生きていた女性との獄中結婚を含む心の交流によってである。永山則夫の例は、言わば拡大化された形で、他者との交流の質の良し悪しが、人の自己の健全な育成にどれほど大きな影響を与えるのかを具体的に示している。妻となる女性との心の深部に触れる愛情を伴う交流の中で永山は、二審の死刑から無期懲役への減刑判決が下されたこともあり、それまでと違って、罪の償いの一環として、自分と同じような貧困などの不幸な境遇に育つ将来の世代に対する支援の方法を探るなど、真摯に生きる姿勢を見せている。そのような自分の夢を記す妻への手紙には、取り返しにつかない過ちを犯した痛みや苦しみとともに、それを積極的な仕方では償おうという優しい、柔和と言ってもよい心の側面が現れている。母親や他の家族への当てつけも込めて4人の人を殺害するという、投げやりで他者の生命の貴重さなど思念の外に置いていたかに見える人間の変貌の在り方として、手紙を読む者の心に人間の良き側面への希望を持たせるものである。永山が社会に訴えたかったことは、もう自分のようなものが生まれないように社会の側がその制度や構造を変えてくれ、ということであったそうであ

るが、まさに、そのような永山の訴えは、道徳哲学や政治哲学の研究者に留まらず、社会の成員すべてにも深刻な思考を迫る大いに意味がある訴えである。

### [ハリの議論：心の病の社会的原因]

さらにこのような人間関係の質が人の生全体に及ぼす影響について更なる証拠として、ヨハン・ハリ (Johann Hari) の議論が注目に値する<sup>(5)</sup>。それは、薬物中毒やうつ病が蔓延している事態に対処するとき、それを単に脳のメカニズムの損傷・狂いとして医療技術によって解決されるべき問題として捉えることの不十分さを強く主張している。脳のメカニズムが機能不全を起こすのは、単なる生理学的なレベルで十分に理解可能な事態などは稀で、人間関係の歪みが大きな影響を及ぼしている場合がほとんどである。したがって、薬によって症状が治まっても、その真の原因が取り除かれない限り症状はまたぶり返す。それに薬の増量によって対処しようとする、悪循環に陥るだけではなく薬自体の副作用によって症状がより重くなり脳自体のメカニズムが大幅に狂ってしまうことが起きる。ハリが専門家や多くの患者や彼自身の経験に即して考える対応策は、薬が有効である限り使用すればよいが、何よりも薬を必要とするほどの症状を生み出しているその人の心の痛みを生み出している人間関係の歪みを改善することに力を注ぐことである。むろん、場合によっては大きな社会の変革を必要とするので、そのために革命的な変化が必要であるという精神療法家も存在するほどであるが、そのような言葉を単なる誇張ということではできないのである。介護や子育てなどが社会全体の協力によって支えられるべき事柄であることが示すように、心の病を生み出すような人間関係の歪みを正すためには、社会の大きな変革を必要とする。このことは後でより詳しく説明することにする。

### [ワイルドの言葉：自己の中の他者の存在]

さらに、オスカー・ワイルドの有名な言葉に『ほとんどの人は〔自分自身ではなく〕他人である。彼らの思考は、誰かほかの人の考えである。彼らの生

はほかの人の模倣であり、彼らの情熱は引用である』というものがある<sup>(6)</sup>。これは、自分自身の本当の自己・魂を持つことなく、他人の魂で代替して済ませている人々の批判であるが、その批判についてはここではおくとし、人間の自己形成における他者の影響を見事に描いている言葉としても読むことができる。われわれは自覚的、無自覚的を問わず、他者の在り方に影響を受けてしまうのである。むしろ、単に模倣が起こるのではなく、そこには、讃仰、嫉妬、劣等感など様々な情念が関与し得るが、ともかく、それらの情念を伴いつつ、他者の態度、言動などに応じる形で自己の内容が形作られることが起こるのである。実際、言語の習得を考慮してみても、まず他者の言語行動の真似びから出発して、独自のスタイルや新たな表現も生まれてくる。他者の在り方は最低限自己の形成の際の可能なメニューを提供する。それに反対するのか受け入れるのかは自分の判断による。また、ワイルドが批判したように無意識のうちに受け入れてしまうことも起こりうる。さらに、支配と従属の関係が存在する場合には、自己の自尊心が傷を受けトラウマになった場合には、その後の自己の形成に悪影響が出てしまう可能性が高くなる。

#### 〔他者との交流の困難な側面：ニーバウマーの例が示す相互理解の困難さ〕

また、他者の理解については慎重に損なうことの必要について興味深い例が見出されているので、それについても記しておく。それは、自分の現在受け入れている前提が実は誤っているかもしれないという可謬論的立場を常に保持しておくことの大切さを物語るものである。

ニールス・バーバウマー (Niels Birbaumer) は、は依存症の治癒が極めて困難なのは、たとえ医療によって症状が亡くなるまで治癒が進んでも、もともとの症状を生み出した環境が変化していないのにもかかわらずその環境に戻らざるを得ない事に原因を求めている。様々な医療技術により治癒に向かっても、もともとの症状を生んだ原因がなお存在するような環境の中に戻ってゆけば、再発が起こることは容易に想像できる。したがって、根本的問題は、医学的なものではなく、社会的問題であると語っている。病について考察する場合

にも社会学的想像力を駆使することが重要な役割を果たし得るのである<sup>(7)</sup>。

より重要な事実として、パーバウマーは ALS などにより閉じ込め症候群に陥った人々の多くが自分の生について十分満足していることを述べ、そのような状態がいかに生まれるのかについての説明を与えている。人は、積極的な活動を実現することが不可能であることを自覚した時、その事態に対処して、そのような積極的な活動による喜びをえようとする意欲を抑えることを行い、受け身に姿勢に徹する。そうすることにより、不充足感を減少させ、逆に受け身の姿勢に徹することによりその状態でも得られる喜びにより活発に反応し、より深い喜びを感じることができるというのである。いわば、状況に即して「足るを知る」という態度を自然に身に付けるというのである。むろん、直ちにというわけではないが、人間には事態に即応して生の喜びを維持する能力があるというのである。これは、「私たちに変えられないものを受け入れる心の平穏を与えて下さい。変えることのできるものを変える勇気を与えて下さい。そして、変えることのできるものとできないものを見分ける賢さを与えて下さい。」という箇所を含むラインホルト・ニーバーの有名な祈り (the serenity prayer) を思い出させる<sup>(8)</sup>。われわれは変えることができるものと変えることのできないものとを区別する賢明さが必要なものであり、閉じ込め症候群の状態にある人は、極めて不幸でしかありえないのであり、それは避けようがない、変えようがないという一般的な理解は、現実によって否定されている。すなわち、このような事例は、ニーバーが望んだ賢明さに達していないことが示されている残念な例なのである。

この事例は、医療技術の発達が、いかに困難な問題をわれわれに投げかけているかを示している。急速な科学技術の発展の時代がもたらす深刻な諸問題の存在を痛感させる。また、彼の挙げる例は、一つの深刻な問題に対する良き結果をもたらした解答と思われるものが、単なる医療技術の発達によって見出されたのではなく、医療技術の発達の背後に、人間の可能性を超えるかもしれないことをも辞さない愛情の力が存在していることをも明らかにしている。遷延性意識障害の家族の言葉として有名な「あなたの声が聴きたい」という言葉が

示す、愛する者とコミュニケーションをとりたい、そのためにできる限りの可能性を探ろうという思いとその強い願いに答えた医療従事者の間の連携によって、バーバウマーの示す発見も可能になったのである。われわれは、人間の愛情や連帯の感情の力の大きさとともに、まだまだ多くのことが知られていない人間の在り方について拙速に決断してしまうことの危険さについて心に刻むことが必要である。可謬論が意味するところに深刻に思いを致すべきである。より長く、しかも十分な満足を伴った生活を愛する人々とともにある生活を楽しみつつ生を全うすることが可能であった多くの人々が、絶望のうちに生を断念するという非常に悲劇的な事態が起きてきたのであり、今も起きている。可謬論に即応した形で、多様な意見や試みを知ること、また、そのような情報を広く社会に対して伝えることの重要性が再認識されるべきである。有限な存在である人間は、できる限りの可能性を探りながら判断を下してゆくしかないのであるが、その判断の中には、まだ可能性が尽くされないとして判断を保留しながら、新たな可能性の出現・実現の時を待つという選択肢も存在する。とにかく、現実の人間に対するアイリス・マードックの言う公正で愛情に満ちた注意を払うことが大切なのである<sup>9)</sup>。遷延性意識障害の人々の多くの様々な段階での回復の可能性を明らかにした看護師たちの努力がなされている時、少なからざる医師たちは、医師の常識を現実の人間の在り方への注意よりも重んじた結果、看護師たちの努力に十分な共感を示すことができなかつたのである。

以上のように、われわれは、他者との関係の質が互いの生にとって持つ重要な影響を考慮し、より良い質を確保するための努力を重ねる必要がある。そのために、可謬論的立場をとり、安易に固定的な見方の固執することなく、人間という生命体の有限性と共にまだ十分理解されていない可能性に期待しつつ、公正で愛情に満ちた注意を寄せる仕方に関係を構築し維持することができるような制度や文化を培ってゆくことが大切である。それが、より満足でき誇りうる自己を作りうることにつながる。その制度が参加民主主義であることこそ、私が主張したいことである。次に参加民主主義の基本的特徴・要素を説明する。



## II. 民主主義とは：その内容と正当化理由

民主主義とは何よりも、社会の成員全員にかかわる重要な問題についての解決のための議論に特別な資産や才能などを持たない普通の人々（民衆）が平等な仲間、同胞として有効な仕方でも自由に参加することが保証されている政体である。それゆえ、民主主義には、民衆の参加がいわば構成的要素として組み込まれている。しかし、参加が選挙時の投票などに矮小化される時代の中で、今一度積極的参加の重要性を喚起するために参加という言葉は私は用いる。参加の仕方は、何よりも言論による参加、有効な仕方でも議論に参加し、各々の意見を表明し、互いにそれらの意見に対して真摯な対応することが義務付けられる仕方である。政府の方は、民衆によって表明された様々な議論に対して、尊敬を体现する仕方でも相応の対応をなす責任と義務が課されている。議論に人々が自由かつ平等に参加し有効な仕方でも議論の内容に貢献することが保証されているが、その貢献の可能性は、問題の提起から解決策の実践的検証に至るまでの複数の段階において保証されている。一つには、何が公共的な問題として政治的な議論の対象になるのかを決める段階、次に、政治的問題として論じるにふさわしいと判断された問題に関してどのような解決がより良い解決であるのかという政策の決定に関する議論の段階、そして、最後にそれらの内の一つが解決策・政策などとして受け入れられ実践された結果が、望ましい結果をもたらしたか、それともそれが予想していなかった負の結果をもたらしていたか、また、そのような結果を踏まえてどのような対策をなすべきかというフィードバックの段階での保証である。以上のような参加は、選挙時の投票に限られず、デモをはじめとして多様な形をとる。

### 〔民主主義の認識論的メリット〕

このように様々な段階で人々の参加が正当化されねばならないのは、何よりも人々が置かれた社会的な位置、地理的位置等の状況によって影響を受け、自

分と違った位置にいる人々の立場から問題を考えることが困難であることである。存在によって意識が拘束されることは往々にして起こりうることである。しかも現代のように大規模な分業による協業という複雑な社会システムの中で人々の生活の諸側面に影響をもたらす数多くの事象が生み出されているとき、その複雑な因果関係を理解し、よい政策を確定し、その結果を的確に予測することは容易ではない。それゆえ、より良い決定、解決を目指すとき、様々な仕方でも立場を異にする多くの人々の意見を踏まえた議論による決定が必要とされるのである。陪審員裁判の理念も少数の専門家の見識よりも多数の人々の多様な視点を重んじることから生まれているのである。

そのような平等な参加を正当化する理由は、まず何よりも、自由な意見の表明権やそれを保証する参加の権利の保障による必要な情報の確保という目標である。それらの多くの人々の意見は耳を傾けるに値する。さらに、関連した多様な情報へのアクセスが保証されていなければ情報の欠如による誤ったあるいは不完全な結論を生み出す可能性が高くなる。政府の意思決定や政策の執行における説明責任や透明性も同様により良い判断に到るために不可欠な要件である。このような広い意味での関連する情報への自由なアクセスの権利の保障が、まさに民主主義の根幹をなしている。社会の中に民主主義を豊かに実現するため不可欠の要素である。また、自由な意見の表明権と必要な情報への自由なアクセスは、民主主義の不可欠の要件であるとともに、それらの要件の実現による健全な民主主義的政体が生み出す良き結果のゆえに上記の要件を備えた民主主義の正当化理由をなしている。

[相互に連帯するする人間という像と整合的な民主主義の構成要素としての平等]

上記のような平等な参加とそれに対する政府の尊敬の念を体現した対応の正当化根拠をなすものは、Iで述べた人間像を前提とした、人間の基本的な平等である。それは、様々な種類の能力における平等ではない。芸術的才能や数学的才能、更にはスポーツ選手となるための才能などを考慮すれば明らかかなよう

に、人々のうちにそのような能力の点での平等などは存在しない。人々は多種多様な能力に関して異なったレベルの能力を持って生まれ、さらに誕生後の環境により多様な種類とレベルの能力の持ち主として生きてゆくことになる。しかも、それらの能力は静態的なものではなく、変化し得るものである。このようなことは、様々な現実の世界の多様な在り方を見れば明らかである。ここで問題としている平等はそのような能力としての平等ではなく、この地球上に同じ種に属する生命体として生まれ、はかなくもろい生命の火を灯しながら共に死への道を歩む存在として、互いを必要とする存在であり、事実、そのような事実に相応するように、互いに魂への態度を持ち合い、その上、互いの善意を期待する期待・願望を持つものとしての存在の間に成り立つ平等である。最低限の協力関係を成り立たせるだけの関係の質を維持できなければ人類の生存は不可能であつたであろう。平等な尊敬や連帯感も、そのような貴重かつ果敢ない生命の火を灯しながら様々な偶然に左右されながら人生を歩む者としての連帯感とそれに基づく態度に根差したものである。言うまでもなく、ここで述べている平等を成り立たせている態度や感情には、それに相反する邪悪な態度をとる性質を対応物として有するものである。そのような対立するものをも持つ存在であるゆえに、言わば正の部分を助長し、負の部分を抑える効果を持つ社会体制を構築し、維持する努力が要請されるのである。

#### 〔民主主義的徳性と人間の成熟〕

さらに強調すべきことは、今述べた民主主義の基本的特徴を実現する仕方で、このような相互に互いの意見に耳を傾ける中で、互いが変化し得ることである。すなわち、自己の内容、在り方が異なった形で形成され得るのである。自己の世界・立場にのみに注意を向けては獲得できない、より豊かな、そして、現実の世界の複雑さ、多様さの理解を踏まえた自己形成が可能になる。これはアイリス・マードックが述べた、肥え太った容赦のないエゴによる我田引水的な事態の理解、マードックがファンタジーと呼ぶ理解を超えて、より現実 に即した理解の上に立った自己が形成されることを意味する。独りよがり

よる自己の都合に限局された極めて狭小な視野の下に形成されるのではない、他者にそして広く世界に開かれた形での自己形成を助けるという、極めて建設的な意味・意義も存在する。しかし、マードックが強調しているように、容赦のないエゴの磁力を逃れて、他者の立場に身を置くという作業は容易ではなく、そのための徳性の陶冶が必要とされている<sup>(10)</sup>。その意味でも、容易に身に付け得ない徳性を互いに要求し合うことにより、その育成の動機づけを与え合うこと、言うまでもなくそのような態度を他者が持たない場合、自分の意見が無視され、場合によっては、極めて不利な社会的立場に追いやられることもある。それゆえ、そのような徳性の涵養と発揮を互いに求め合うことは、単なる理念上のことではなく、一人一人の生活、そしてそれにより築かれる一人一人の自己の在り方とに密接に結びついているのである。このように民主主義の不可欠の要件である平等の条件を満たすことは、自由な人々の交流を生み、より健全な自己形成を促進する効果を持ち、民主主義を擁護する主要な正当化理由をなすのである。

#### 〔可謬論とフィードバックの重視〕

エリザベス・アンダーソンは、多様性・議論・フィードバックという三つの特性を民主主義の重要な不可欠な要素として挙げているが、まさに上で述べた民主主義の主要な要素を明確に要約するものと言える。ただし、より正確に言うると、すべての段階で働いているというべきであると私は考えている。選挙における投票だけではなく、デモや政府・自治体に対する意見表明、議員に対する何らかの形での意見表明など、様々な形でのフィードバックを必要に応じて随時行うことが民主主義の活性化に役立ち、実質的な参加を可能にし、民主主義を形骸化から救うのである。また、そのようなフィードバックの役割を重視する根底には、有限な人間の誤りやすさを痛切に自覚することから生まれている可謬論的態度の存在がある。さらに、可謬論は、同時にその誤りやすさをできうる限り最小化し、より多くの人々が納得できる間主観性という意味での客観性の確立に向けての自由で平等な者同士の活発な議論という民主主義の基

本的要件の実現の努力と結びついている。人間の有限性と、その有限性の範囲内において可能な限りの客観的理性的な判断に到るための民主主義的議論の促進は、緊密な結びつきを持っているのである。

このような人間の基本的平等を自覚した積極的な関与とそれに対する政府の側の真摯な対応の義務と責任という参加民主主義的な関係の確立は、支配と被支配の関係という両者の関係をより減少させ、文字通りの実質的な民主主義の実現に近づけるのである。しかも、アンダーソンは、平等を、支配や従属のない関係、より具体的に言えば、上で述べたような実質的な民主主義の実現が可能であるか否かを平等の基準とみなすことにより、平等概念の実質を明確にしている。平等が確保された社会とは、何よりも、人種や資産の額や性的指向やジェンダー等々により民主主義的議論への自由な参加に支障が出るか否かによって決定されるのである<sup>(11)</sup>。

#### 〔全員一致主義をとらない理由〕

最後に、誤解を避けるために全員一致主義と民主主義の違いについて述べておく。

多様な状況下に置かれている人々からなる複雑な現代社会において、全員一致を期待することには無理があると言ってよいであろう。もし全員一致に固執すれば、議論に終わりが果てしなく続いたり、反対意見の封殺など自由な意見の表明を困難にする強権による沈黙の強制などの結果を招きかねない。民主主義が破壊される可能性が出て来るのである。したがって、そのコストを考慮するとき、全員一致方式をとることは賢明な選択は言えない、ただし、可謬論に立つ民主主義の精神に忠実であるために、反対意見は常に自由に表明できること、そして、それに対する尊重を示す要請がなされ、それに対応することを政府などの権力者が自らの義務として応じるような文化が成立していなければならない。可謬論的態度に基づく謙遜によってこそ、新たな視点や、それに基づく政策や制度の核心の可能性も生まれ、民主主義的なダイナミズムというその核となる性質の良き特性が発揮されうる。

以上のように、自由な参加と可謬論に基づくフィードバック機能の重視によるダイナミックな民主主義体制は、問題の発見、議論、解決法の発見、その実施の結果からのフィードバックによるより確かな知見の獲得など、極めて望ましい特徴を有しており、その維持のために努力するに値する政体であるといえることができる。自由で平等な者が全体にかかわる問題についての公共的な議論を行う体制である限り、それはその社会の中に住む人間の人間の伸び伸びとした、自己形成を助け、より健全な自己を創り出すことに貢献できる。しかし上で触れた永山則夫の社会に対する訴えにもかかわらず、日本社会、そして世界は、前進した側面とともに、破滅への道を進んでいると言ってよい側面をも示している。まさに民主主義の空洞化が進んでいるのである。破滅への道を進むと言わざるを得ない事態は、アメリカの政治理論における碩学であるシェルドン・ウォーリンが「管理された民主主義」、「逆転型全体主義」などと呼んだ社会構造の変化である。次にそれについて説明する。

1960年代のカリフォルニア大学バークレイ校におけるフリー・スピーチ運動や公民権運動に発する急進的な運動の成果を、バークレイの教師として積極的に運動に参加したウォーリンは、その良き遺産として政治の参加の側面の重視、換言すれば参加民主主義にあると考えている。ウォーリンの理解では、民主主義は、関与、権力の共有（権力の偏重を防ぐ）、権力の分散、そして何よりも有意味な平等である。このような意味を有する民主主義は、強大な官僚組織のもとに組織された、強力な権力機構としての強大な国家とは対立するものである。このような民主主義を骨抜きにし管理するのが、逆転型全体主義（*inverted totalitarianism*）である。

### Ⅲ. 逆転型全体主義

ウォーリンがナチズムやスターリニズムなどの以前の全体主義と比べて逆転していると述べざるを得ないと考える、新たな現代的全体主義の主要な特徴は以下のようなものである<sup>(12)</sup>。

## 〔経済が政治を取り込む：成年に達した企業権力による支配〕

新旧の全体主義は、限らない権力への熱望と戦闘的な拡張主義を共有しているが、

1. 前者では、街路には全体主義に共鳴した無法者に占拠され民主主義は政府にのみ残っていたが、後者では民主主義は街路で生きており、統制が効かなくなりつつある政府・国家が民主主義や平和の対する真の危機をもたらすものとなっている。

2. 前者では企業は政治体制に従属していたが、後者では企業権力が政治的な体制の中で支配的になり政策決定に対する強大な影響力のゆえに、まさに逆転したと言わざるを得ない状況を形作っている。ダイナミックな資本主義の代表としてまた科学技術と資本主義の統合によって利用可能となった拡張してやまない権力の代表としての企業権力が、全体化の衝動を生み出している。ナチの場合は生存権などのイデオロギー的な観念によって提供された。以上の様な企業権力の支配力・影響力の増大について、ウォーリンは、「企業権力が成年に達した」と表現している<sup>(13)</sup>。このことについて、スーザンジョージが紹介しているエピソードは極めて示唆に富んでいる。ロバート・ルービンが、シテイ・バンクグループのトップに電話した時、相手が今大事な用件で話しているので少し待ってくれと言われた時、ルービンは、冗談で「君は政府を買っているのかい。You're buying the government?」と言ったそうである<sup>(14)</sup>。ルービンこそゴールドマン・サックスの総帥からクリントン大統領の財務長官になり大恐慌の教訓をもとにして作られたグラス・ステイーガル法を廃棄して、銀行業と証券業の間に建てられた壁を取り払い、リーマンショックをもたらした銀行の抑制のない投機的な動きへの道を開いた人物であり、現代の金融資本主義、ウォールストリート支配確立の立役者の一人である。

3. 前者では大衆動員がかけられ、大衆に集合的な権力と力の感覚を与えることに努めたが、後者では大衆が政治的に動員を解かれた社会が求められ、一般的な恐怖や不安を促進する手段が用いられている。それは、突然の警報の発令やテロリストの細胞の発見や、通常の法的な手続きなしの逮捕や長期の拘留、

ひどい拷問、さらには、容赦のない人員削減、年金や健康給付の撤回や削減、社会保障や貧しい人々に対する質素なものでしかない健康給付の民営化であり、企業国家的体制が確立される。

このような不確実さと依存を促進する手段が用いられている結果、多くの下層に属する人々は無力感の中に沈殿し、受け身で従属的な態度が拡がる。下層に追いやられた人々、特に有有色人種の置かれた悲惨な状況は、**Black Lives Matter** 運動の出現が雄弁に語っている。このような運動を展開しなければならないほどの抑圧にさらされているのである。命をも失う可能性をも含むのであるから、重罪人としての投票権の喪失や、刑務所に長期収容されることなどは当然のように起きている。アメリカのアフリカ系やヒスパニクス系の人々の刑務所への収容率は群を抜いている。それは明らかな差別と抑圧の結果であることを示しており、様々な口実の下に選挙における投票が阻止される事例もしばしば起きている。民主主義社会と呼ぶことがはばかられる事態である。このような差別を許している背後には、差別によるはげ口を求める人々の存在も無視できない。不平等がより一層の不平等を生むのである。そのような不安定と不安の中に置かれた人々の不満と怒りが、トランプ政権の出現やバーニー・サンダースの予想を超えた得票を可能にしたのである。そのような不平等と不自由に基づく体制を支えている要素の主要なものは以下のようなものである<sup>(15)</sup>。

弱体化した立法府、従順かつ抑圧的な法体系、与党であれ野党であれ、より貧しい人々を無力感と政治についての絶望感を残して置き去りにし同時に中産階級には失業の恐れと、ニューエコノミーが回復した時の素晴らしい報償の期待の間に宙づり状態にしながら、永遠に豊かな支配階級。よいコネがある人々、そして企業に好意的にふるまうように現存の体制を再編することに心を砕く党が支配する政党制度。さらに、おべっかをつかいますます集中化しているマスメディアや大学とその後援者である企業の統合体、また資金を十分与えられたシンクタ・ンクや保守的な基金、最後に、テロリストや怪しい外国人や国内において政府の政策に異議を唱える人を特定することを目指す、地方の警察と全国的な法執行機関の間のますます緊密になりつつある協力などである。



このような形で逆転型全体主義は、平等な個人の十全な意味での政治やその他市民社会の様々な営みへの自由で平等な個人としての参加をますます困難にし、民主主義体制を破壊しつつある。今述べたような事態は、アメリカだけで起きているのではないことは明らかである。日本における格差の拡大、子供の貧困の増加、企業が惹き起こす様々な不祥事、森友、加計などのスキャンダルを考えただけでもそれは明らかである。公文書を改ざんし、それで国会審議を乗り切ろうとする傲慢さ、公僕としての責任感と誇りのなさは、ほとんど末期症状を呈していると言ってもよいぐらいである。

次にこのような事態を改善するための基本的な考えといくつかの考慮すべきことを述べて結論とする。

#### Ⅳ. 参加民主主義の実現：民主主義のインフラ整備

民主着の要件として挙げた、自由と平等とフィードバックなどをみたくするには、社会の多くの制度や考え方、文化の広く政治にかかわる側面の根本的な変革が必要である。自由や平等などを実現するためには、生活の物理的な基盤を確保し維持するために、道路や港湾などのインフラの整備が不可欠のように、民主主義が維持され活性化されるためには社会構造や文化の変革が必要となる。社会の基本的な生活を維持し活性化させるために道路や港湾など基盤、インフラ整備が不可欠なのと同様、民主主義の健全な実践のためには、自由で平等な公的な問題に関する議論やその他の市民社会への参加を可能にするための、様々な要件が満たされねばならないのである。

それらを挙げれば、何よりも支配と服従の関係をできる限り減らし、こころおきなく自分の意見を表明できる環境が整えられねばならない。さらに、色々な情報へ自由にアクセスできること、したがって政府の政策やその実施などについての透明性が確保され、それらの情報にアクセスし、思いを巡らせることができる時間的、そして心身の余裕、さらには、それらの情報や余裕を公的な問題についての公的立場に立っての思考、議論をなし、互いの意見を尊重す

ることができる謙遜さなど様々な徳性を身に付けることが必要であり、そのための努力を怠らない徳性も要求される。民主主義は、広い意味で学習して身に付けるべき徳を必要とする政体であることを深刻に受け止め、民主主義的徳性の涵養のための努力が日々の生活の中での他者との交流の中で実行されねばならない。デューイが述べているように、民主主義は一つの生き方であり、それは実践を通して身に付けるべきものなのである<sup>(16)</sup>。このように考えるとき、まず、その焦点をなすものの第一のものとして浮かぶのが、アンダーソンが私的政府（private government）と呼ぶものである<sup>(17)</sup>。

### 〔私的政府：職場に民主主義を〕

アンダーソンが理解している私的政府とは、国家ではなく、私的な機関（ことに企業が考えられているが）であり、そこでは、役職者が、部下に対して恣意的な専制的権力を行使しているような機関を指している。政府という言葉で国家を中心的にさすようになったのは、それほど古いことではないそうである。問題は、多くの人が人生の多大な時間を過ごす職場において、上層部の恣意的な命令に従わざるを得ず従属的な立場での横暴に耐えねばならない時間を過ごすことを強いられている現実である。しかも、上層部の支配は、仕事や職場に限られず、仕事から離れた私的な活動や嗜好にまで及んでいる。例えば、上層部が支援している政党や政治家と対立する人たちを応援したり、彼らが認めていないトランスジェンダーや同性の人との親密な関係を結ぶことなどが、抑制されたり禁止されたりしている。その支配のひどさを象徴する事例として、食肉の包装工場における8時間の作業中のトイレ休憩の禁止や制限などがある。おむつを使えと本気で命じられたそうで、このような職場環境に置かれて人たちの心身への悪影響は計り知れない。そのような時間を過ごす中で、余裕をもって公共の問題に関して市民としての姿勢を保ち、多くの他者の立場や意見を考慮した思考を行い自分の意見を形成することは極めて困難である。しかも、そのような生活の中で自由な参加ではなく、支配への服従の姿勢を学ぶことになりかねない。それは民主主義の精神と正面から対立する在り方

である。このような非人間的な取り扱いが、現代の体制の中枢をなす企業社会で展開されていることは事態の深刻さを示すとともに、改善の困難さも示唆している。

むろんこのような体制は、激烈な市場競争の中で勝ち残ってゆくためには、効率を最優先せざるをえず、そのために厳しい上下関係に基づく支配服従の体系としての秩序が不可欠であるという理由が挙げられ現実の厳しさのゆえに、ある意味で仕方がないということも反論として提出されるであろう。しかし、いかなる縛りもない市場競争が生み出した悲惨な結果のゆえに、次第に競争を規制する様々な装置が工夫されてきたのであり、民主主義体制と共存し得るための市場の民主主義的規制を行うことも不可能ではない。しかも、そのような規制を設けないことがもたらす大きな弊害については、気候変動による人類の危機、多くの心身の病に見舞われる人の数の増大、生き難さの増加、格差の増大等々、さらには、軍産学複合体の利益のための悲惨な戦争の発生、さらには核戦争による人類滅亡の危機などがあり、現実の厳しさを理由の放置しておいて済む場合ではない。逆に、現実の厳しさを理由に市場競争に縛りをかけ、民主主義の活性化を図ることが優先されねばならない。現実はそのままで危険な状況に立ち至っていることを思うべきである。のんきに希望的観測で済ましておくにはあまりに切羽詰まった事態になっている。規制のないところで生じた最底辺への競争の最底辺が、人類の滅亡などの途方もない悲劇、悲酸を意味しているとき、民主主義を標榜しながら、それに見合う真摯な努力をしない政治家は、似非民主主義者とみなすべきである。次に民衆の運動が統合されない一つの理由をなしている、アイデンティティ・ポリティクスの罫に対する対処について述べておく。

#### [アイデンティティの柔軟な理解]

自己の形成への民主主義的参加の効用の理解は、自己形成のダイナミズムを捉えており、多文化主義やアイデンティティに力点を置く立場が陥りうる罫からの防御を可能にする。アンダーソンは、所謂アイデンティティ・ポリティク

すが、例えば、情勢や有色人種が、当該のアイデンティティに特権的な地位を与え、そのアイデンティティに基づくものとして意見を述べ議論に参加すれば、多数派をなす人々も支配層も少数者や被支配層と区別される自らのアイデンティティに基づいた議論を展開する形で議論に参加することを許容することになってしまうと考える。それでは真の意味で多様な意見、異なった立場に置かれている人々の意見をできうる限り取り入れながらより良い解決を望むということが困難になってしまう。抑圧されている少数者や被支配者の意見を尊重し耳を傾けることは無論良いことではあるが、それは、被抑圧者や被差別者、被支配層を一つの固定したアイデンティティに結びつけ、そのようなアイデンティティに基づく議論にのみ対応するということになれば、真の意味での多様な意見に耳を傾けることも困難になる。それでは、より有効的な交渉への道も極めて対立的な雰囲気のものになることは、容易に見て取れる。各集団の固定されたアイデンティティに閉ざされた形での議論は、最初から困難を予想させるのである。

そのような形でアイデンティティを限られたしかも固定されたものに縮小化・矮小化することなく、多様なアイデンティティを持つ存在として、民主主義の観点からどのアイデンティティに重きを置くことが公共の問題の解決に貢献し、さらにはより良い自己の形成を助けるのかを様々に考慮を巡らせるべきである。そのように考えるとき、自分のあるアイデンティティによって不利益を被っていることを同様の被害を被っている人々ともに訴えることは、当のアイデンティティを固定化し自分を言わばその箱の中に閉じ込めながら議論に参加し要求をなすのではない。そうではなく、その様な当該アイデンティティに基づく差別の非合理性を明確にすることは、真に公共的な解決を目指すことを意味する。何よりも、それは正義という共通善の実現を目指す行動である。単なる自己の狭いアイデンティティを共にする人々の利益のみを考慮しての行為ではない。正義にかなった社会を作ることは、何よりも社会全体が目指すべき公共的な目的であり、アイデンティティに基づく非合理的な差別や抑圧を正すことは、公共の善に資する行為なのである。その意味で、自己の形成のダイナ

ミズムとそれが意味する自己のアイデンティティの多様性と複雑さ、そして、流動的な自己の在り方の中でどのアイデンティティに重きをおき理性的かつ自由な決定をなすこととの重要性を理解されるべきである。その意味で、あるアイデンティティを運命であると考え、最悪の場合ジェノサイドを惹き起こす可能性を持つ極めて危険な錯誤であることを心に刻むことである。ホイットマンの有名な、「私は矛盾しているか。その通り私は矛盾している。私は、広大であり、多くのものを含んでいるのだ。

(Do I contradict myself?

Very well then I contradict myself;

I am large, I contain multitudes.)」

という開かれた精神をもって自分のアイデンティティについてもとらわれなく考えればよいのである<sup>(18)</sup>。

最後に、格差の是正のための累進課税の可能性について語って、逆転型全体主義とその素地をなす私的政府に対する対抗策への手掛かりの一つを述べて筆をおきたい。

資産の格差は、権限や権力の格差を生み、民主主義の要件である平等を破壊してしまう。そのような危険を防ぐために、富裕層や巨大企業に対する課税の強化が提案される。問題は、そのような提案に対して、それは富裕層や巨大企業が外国に移ってしまい余計に貧困層の苦労を増やすだけであるという反論がなされることである。しかし、このような反論は、あまりに一面的で、富裕層や巨大企業の実態に合致していない。第一に、実際アメリカでの最近の研究で、富裕層の多くは、その土地、社会に根付いているため、よほどの打撃を受けるような課税の強化でない限り、土地を離れることはないことが明確に発見されている。さらに、巨大企業に関しても、もし自己の利益のみを考えて土地や国を去る企業が出現すれば、政府が中心になり、それらの企業に対する対抗措置をとることは可能である。巨大企業とは言え、オールマイティではない。多くの国民すなわち消費者が身勝手な行為をとがめて懲罰的な運動を組織的に展開すれば、好き勝手な行動をとることはできなくなる。重要なことはそのよ

うな企業の行動を監視し的確に反応する民主主義的文化と徳性を身に付けた民衆の存在であり、それらの民衆の意向に積極的に対応する政府の存在である。参加民主主義の実質化、同時多発的実践が望まれるゆえんである。それが余裕を持った内容豊かな生活に育まれたより良い自己の形成の基盤を提供するのである。

#### 参考文献

- 1) Anderson, Elizabeth : *The Private Government*, Princeton UP, 2017
- 2) ——— Sen, Ethics and Democracy, *Feminist Economics*, 9(2-3), 2003
- 3) ——— : “What is the Point of Equality?” *Ethics* 109(2) : 1999
- 4) Birbaumer, Niels, *Your Brain Know More Than You Think : The New Frontiers of Neuroplasticity*, Scribe, 2017, n
- 5) George, Susan, *Whose Crisis, Whose Future?* Polity, 2010
- 6) Hari, Johann, *Chasing the Scream : The First and last days of the War on Drugs*, Bloomsbury, 2015
- 7) ——— *Losing Connections : Uncovering the Real Causes of the Depression*, Bloomsbury, 2018
- 8) Niebuhr, Reinhold <http://www.beliefnet.com/prayers/protestant/addiction/serenity-prayer.aspx> 2018. 3. 21. アクセス可。
- 9) Sen, Amartya, *The Identity and Violence : the Illusion of Destiny*, W. W. Norton & CO, 2006
- 10) ——— *The Idea of Justice*, Harvard UP, 2009
- 11) Young, Cristobal, “Chris Christie says high state taxes drive millionaires away. Here’s why he’s mistaken.” *Washington post*, June 9, 2016 2018. 3. 21. アクセス可。
- 12) Whitman, Walt, *Song of Myself* [http://www.english.illinois.edu/maps/poets/s\\_z/whitman/song.htm](http://www.english.illinois.edu/maps/poets/s_z/whitman/song.htm) 2018. 3. 21. アクセス可。
- 13) Wilde, Oscar, *DeProfundis*, <https://ebooks.adelaide.edu.au/w/wilde/oscar/profundis/> 2018. 3. 21. アクセス可。
- 14) Wolff, Richard, *Economic Update* <https://archives.kpfa.org/data/20171222-Fri1000.mp3/> 2018. 3. 21. アクセス可。
- 15) Wolin, Sheldon, *Democracy Inc*, Princeton UP, 2008
- 16) ———, “Inverted Totalitarianism”, *The Nation*, May 1, 2003 <https://www.thenation.com/article/inverted-totalitarianism/> 2018. 3. 21. アクセス可。

- 17) 浜野研三, 「アイリス・マードックの道徳哲学序説：その概要と実践的含意」, 『人文論究』第 65 巻第 1 号, 2015
- 18) 堀田善衛『小国の運命・大国の運命』筑摩書房, 1969
- 19) 堀川恵子『永山則夫：封印された鑑定記録』岩波書店, 2013
- 20) ———『死刑の基準：「永山裁判」が遺したもの』日本評論社, 2009

## 注

- (1) 17) p.264
- (2) 1), 2), 3) および 9), 10) を参照。
- (3) 15)
- (4) 19), 20) を参照。
- (5) 以下の叙述は, 6), 7) によっている。
- (6) 13)
- (7) ニーバウマーの議論の説明は, 4) によっている。彼は脳の可塑性を説明の核としている。
- (8) を参照。
- (9) マードックの考えについては, 17) を参照。
- (10) 17) での説明を参照。
- (11) 3) で興味深い議論がなされている。
- (12) 以下の記述は 14) と 15) によっている。14) pp.41-48 に詳しい概念の説明がある。
- (13) 15) を参照。
- (14) 5) p.42
- (15) 15) を参照。
- (16) アンダーソンは, その民主主義の議論でしばしばデューイの言葉を好意的に引用している。
- (17) 以下の説明は 1) によっている。
- (18) 12) を参照。